

まえがき——ドストエフスキーは未来と対話する

伊東一郎

高校二年の時に入院し、偶然『罪と罰』を入院先の病院で読んだ。そのせいで回復が遅れたような気がする程の衝撃を受けた。続いて『カラマーゾフの兄弟』を読んだ。終わりのないバッハの「パッサカリアとフーガ」が聞こえてきた。ロシア民謡だけだった私のロシアがいきなり見晴るかす広がりの中に展開した。早稲田大学に進学し、グリーククラブでポリフォニーを歌いつつ受けていた新谷敬三郎先生の授業で初めてバフチンのポリフォニー論を知り、ストンと腑に落ちた。

それから半世紀が経ち、ドストエフスキー生誕二〇〇年の年になった。それを記念し、現在の日本のドストエフスキー研究を世に問う論集を出そう、という企画が、高橋誠一郎氏と井桁貞義によって立てられた。五〇年前にドストエフスキー生誕一五〇年記念のクラス雑誌と一緒に作った畏友井桁貞義から共編者にと、思いがけない慇懃があった。ドストエフスキーからは長いこと離れていた私だったが、僭越ながら喜んで引き受けさせていた。だいた。

振り返ればドストエフスキー没後僅か十年余りの一八九二年に出た内田魯庵訳『罪と罰』から日本におけるドストエフスキー体験は始まる。十九世紀から二十一世紀まで三つの世紀を跨ぎ、ロシア革命の勃発とソ連邦の終焉を超えて、ドストエフスキーは変わらず私たち日本人の想像力を刺激し続けてきた。そのことは、若い研究者たちの清新な研究を核に、様々な世代の研究者が様々な角度からドストエフスキーを論じたこの論集からも見えてこよう。生誕二〇〇年の年を迎え、二十一世紀ももう二〇年の年を重ねたが、ドストエフスキーが常に新しいのは何故か。それはバフチンが言うように、ドストエフスキーが、他者を主体として描きだす対話的原理を私たちに開示してみせ、その世界が絶えず私たちに開かれているからであろう。本書のタイトルを『ドストエフスキーとの対話』とした所以である。本書がドストエフスキーを仲立ちに、研究者たちの新たな出会いと対話の場になることを願うものである。

日本におけるロシア文学

新谷敬三郎

一 ロシア文学移入の径路

日本にロシア文学が継続的、多少とも組織的に入ってきて、何らかの役割を果すようになるのは明治以後、ほぼ一八八〇年代からである。

ロシア文学移入の径路は、明治、大正期においては、大別して三つ考えられる。(一) 東京外国語学校、(二) ニコライ神学校、(三) 丸善、である。

一、東京外国語学校が正式に発足したのは明治六年(一八七三)十一月のことで、開成学校から分離したのである。開成学校はやがて明治十年(一八七七)東京大学となり、それが帝国大学となるのは明治十九年(一八八六)帝国大学令によってである。初め外国語学校は専門学校への予備階梯であって、明治七年には愛知、広島、新潟、宮城にも設立され、開成学校への進学コースであった。のちに東京外国語学校はなかに高等商業学校を置き(明治十七年)、それが一年後には逆に東京商業学校と改称した。管理、経費の合理化と外国語は商業に必要だという認識からだったという。それが明治三十年(一八八七)にはその商業学校に外国語学校を付置、三十二

年それが独立してふたたび東京外語学校が生れるのである。いずれにしても、明治三十年代初めころまでは日本の高等教育の制度はかなり流動的で、固っていなかった。この不安定のために、のちの二葉亭四迷、長谷川辰之助は明治十九年に東京商業学校附属語学部露語科を卒業まぎわに退学するのである。彼が東京外国語学校に入学したのは明治十四年（一八一）一、十八歳のときである。この年の一月、ロシアではドストエフスキイが死に、三月には皇帝アレクサンドル二世が人民の意志派のテロに倒れている。当時の外国語学校におけるロシア語教育がどういうものであったかについては、二葉亭の同級生太田黒重五郎の「種々なる思ひ出」（明治四十二年六月「新小説」、岩波版『二葉亭四迷全集』第九卷所収）という談話がある。それによると、当時は単に語学の勉強ばかりでなく、地理も歴史も代数も幾何もすべてその習っている外国語で授業し、試験の答案にもすべてロシア語を用いなければならなかった。そして毎週一回土曜日にある科目について一人ずつ試験をされた。上級になると、ロシアの有名な小説を教えられる。ロシア人が二人いて、一人はコレンコ、もう一人はアメリカへ亡命したグレイ、このグレイが大変朗読が上手でテキストがたくさんないから先生が読んできかす。トルストイ、カラムジン、プーシキンなどの作品を生徒は黙ってきいていて、読み終ると、その小説に現れた主人公の性格を批評したりレポートを提出する。先生がそれを見て直してくれる。

こうした外国語学校の、とくに文学教育についてももう少しついでに調べたものがある。北岡誠司の「二葉亭とロシア文学——小説観を中心に」（角川版近代文学鑑賞講座第一巻『二葉亭四迷』所収）である。それによれば、二葉亭が在学していた頃の外国語学校の図書館が所蔵していたロシア語関係の本はすべてで三百点足らず、冊数で二千余、つまり同じ本が幾冊かだぶってあったということで、そのなかで語学、文学関係は三分の一以上占めていて百点あまり、さらに文学となるとせいぜい五十点余、そのなかにどんな本があったかは詳らかではないが、この冊数ではとてもある作家や詩人の全集があったとも思われず、おそらくは教科書風に編纂したアンソロジーが大半であったかもしれない。そのなかにストユニン（ウラジーミル・ヤコヴレヴィチ、一八二六—一八

八)の『露国外国文学論文指南』という本と『露文学教授論』という本があつて、これらの本によつて生徒たちはロシア文学あるいは文学一般について教えこまれた。グレーの教え方がこのストユーニンの教授法に則つていたであろうと北岡は推定している。そしてそこから二葉亭の「小説総論」も胚胎するのである。

このストユーニンという人はギムナジウムの国語の教師であり、何冊か教科書をかいているが、一八六四年に出した『露文学教授論』は従来の文学教育を一新し、新しい教授法の指針を与えた名著であつたらしく、一九一三年まで八版を重ね、広く世に行われた。

二、ロシア文学が日本へ入つてきた次の径路は通称ニコライ神学校である。今も東京駿河台にそびえているニコライ堂、日本ハリストス正教会の歴史については、牛丸康夫(神戸正教会司祭)の『明治文化とニコライ』という小冊子があつて、それによると――

のちのニコライ大主教(イワン・ドミトリエヴィチ・カサトキン、一八三六―一九一三)がモスクワから日本へ派遣されたのが、一八六一年。函館のロシア領事館付司祭としてきたのである。そのニコライが東京へきて、神田駿河台に居を定めたのが明治五年(一八七二)、二年後に伝道学校を設立した。やがて伝道学校とロシア語で神学を学ぶ幼年学校とを一つにして正教神学校ができる。それは高等小学校を卒えたものを入れ、七年制でロシア語で旧新約聖書、正教訓蒙カテヒジス、教会史、地理歴史、論理学、奉神礼、説教、物理学、心理学、基礎神学、定理神学、規責神学(比較神学)、教会法、哲学といった課目を学んだ。のちに(明治十四、五年頃か)女子神学校もできた。神学校が初めて卒業生を出したのは十五年、卒業生は二人であつたという。その前年小西増太郎が入学している。そのとき入つた生徒は五十名だつた。そのうち三人が明治二十年神学校を出ると、ロシアへ留学した。小西もその一人である。すでにそれまでペテルブルグやキエフの神学校に留學生を送つてはいるが、そのなかでロシア語や文学において逸することのできないのは、岩沢丙吉、この人は神学校教授となり、ロシア公使館司祭セルゲイ・グレーポフと『露西亜文法』(一九〇二)を出したが、この本は大正時代まで唯一の権威ある学

習書として広く使われた。その後、神学校校長となった瀬沼格三郎（一八六六—一九三三）、夏葉（一八七五—一九一三）夫妻、昇曙夢（一八七八—一九五九）、さらに黒田乙吉、茂森唯士、樹下節といった人々がいる。

昇曙夢の回想「研究と翻訳の五十年」（『ロシア文学研究』第三集、昭和二十三年）によれば、教会には三階建ての図書館があつて、二階が宗教書、三階が文学書で、十九世紀ロシア文学のほとんどすべての作品が備えられていたが、関東大震災で三階が焼失し、文学書のすべてが烏有に帰したという。ニコライ大主教自身、文学の愛好者で、とくにゴーゴリ、ドストエフスキイを読むことをすすめた。昇の処女出版は『露国文豪ゴーゴリ』（明治三十七年、春陽堂）である。

正教会は明治十三年十二月から、月二回の機関誌「正教新報」を出していたが、明治二十六年（一八九三）に神学哲学雑誌「心海」、女性むけの文芸雑誌「裏錦」を発行した。それには関竹三郎、それから上記の岩沢丙吉、小西増太郎、瀬沼格三郎といった人々が参画した。「心海」の記事の多くは、もっぱらロシアの雑誌からの翻訳転載だと想像される、そうは断つていけないけれども。とくにモスクワの心理学会の機関誌「哲学と心理学の諸問題」（一八八九—一九一八）が、おそらく有力な一源泉になっていた。この雑誌はN・グロート、プレオブラジエンスキイ、トルベツコイ、ロパーチンらが編集していたが、やがてP・ストルーヴェ、S・ブルガーコフらいわゆる合法マルクス主義者やキスチャコフスキイ、ベルジャーエフら「道標」派、ボグダーノフらマツハ主義者らが寄稿した。ところで例えば、明治二十六年十二月、翌一月の「心海」に、「歐洲に於ける徳義思想の二代表者、フリデリヒ、ニツシェ氏とレオ・トウストイ伯の意見比較」「ニツシェ氏とトウストイ伯徳義思想を評す」という興味深い記事が載っているが、それは明らかにこの心理学会誌の一八九三年一月号に載った上記グロートの「現代の道徳的理想（フリードリヒ・ニーチェとレフ・トルストイ）」に拠っている。九三、四年といえ、ロシアにニーチェが流行し出した頃で、それから七年後にシエストフの『トルストイ伯とニーチェの善の教説』が書かれ、また十年後に『悲劇の哲学』が書かれ、それと前後して日本では高山樗牛らによってニーチェが唱導

されるのである。「心海」のこの記事は非常に早いニーチェ紹介であるといえよう。

が、この雑誌が当時の知識人にどれだけ読まれ、受け容れられたかは、はなはだ疑問である。それは「裏錦」についても言える。この文芸誌のロシア文学紹介についていえば、特筆すべきは残月庵（石川喜三郎）訳「脚本偽皇子」（明治二十六年九月—二十八年二月）で、これはプーシキンの『ボリス・ゴドノフ』の優れた完訳である。その他詩、散文の翻訳もあるけれども、創作とともにほとんと見るべきものがないのは、何といっても正教会という立場が宗教的、というよりむしろ倫理的態度を制約したからであろう。

二 ヨーロッパ経由のロシア文学

三、ロシア文学が日本へ入ってきた三番目の径路は丸善という洋書屋である。それはヨーロッパを経由したロシア文学ということで、それが果たした役割は、ある意味において、前二者より遙かに大きかったといえる。

丸善という本屋が日本の文明開化に参与した事情については、木村毅の『丸善外史』（丸善、昭和四十四年）に詳らかである。この本は惜しいことに記述が正確さを欠いているけれども、明治開化期の風俗を知るという意味で、大変面白い本である。外史と名付けたのは、すでに『丸善社史』（幸田成友著、昭和二十六年）という意があるからである。

丸善は明治改元とともにできた。早矢仕有的という人が横浜新浜町に店を開いたのが、一八六八年十一月だそうである。この早矢仕有的は天保八年の生れ、元来オランダ医者で、慶応三年築地の鉄砲洲にあった慶応義塾に入って、自分の商才を発見した。ときに三十一歳。屋号を丸屋として、最初に商ったのは教科書の大量輸入であった。それというのも、福沢諭吉が、緒方塾でオランダ語を勉強したときの不便が身にしみていたので、慶応三年二度目にアメリカへ行ったとき、教科書を大量に仕入れてきた、それに倣ったのである。が舶来の教科書は決